

## フランス国立図書館の歴史(2・完)

—目録史を中心に—

松本慎二

福田素子

はじめに

- 1 国王文庫成立の背景
- 2 フランス最初の印刷本目録
- 3 デュピュイ兄弟の目録
- 4 ニコラ・クレマンの目録  
(以上第6号)
- 5 クレマンの目録の印刷計画

6 18世紀における目録の状態

7 1840年から1852年にかけての発展

8 1852年以後の業績

—タシュローの努力—

9 総目録刊行開始時における

フランス国立図書館の蔵書状況

—1897年1月1日現在の状態—

## 5 クレマンの目録の印刷計画

クレマンによって作成された第2の目録は、まさに公にする価値のあるものであった。そこで1697年には、この目録の印刷という問題が起こる。このことに関して、クレマンとデンマークの学者フレデリック・ロストガルドとの間に、書簡による意見の交換がなされているが、これは書誌学史上かなり興味あるものである。ここでは、フランス国立図書館所蔵印刷本総目録の序文中に引用されているその一部を訳出して、以下に掲げよう。はじめはロストガルドの手紙である。

《拝啓 私が目録記述の全く新しい方法を発見したと申し上げてから——またこの問題における世界的な権威である貴下のご意見を伺うために、その方法による記述例を1枚印刷させたことをお知らせしてから——2ヵ月以上の月日が経過しました。先

週の月曜にお知らせ下さった貴下ご自身の構想が私のそれに大変良く一致していたので、私自身の構想をご説明申し上げることにしたわけです。貴下のご構想との一致は私をいたく喜ばせ、この小さな発見を自分でも実際以上に高く評価してしまうことになりました。なぜなら私の発見が、貴下のようなこの方面に詳しい方のご意見に運良く一致していたのですから——それゆえに問題の紙(彼が例として印刷させたもの=訳注)をここに同封いたします。この目録法は、将来作ろうと思っている私の蔵書目録においても使用するつもりでおります。もし私が、印刷物を読んでこそ欠陥も完全性もより良く認識されると信じていなかったら、これを私は手書きで書いて貴下にお送りしたごとでしょう。例として私はトッキディデスを選びました。なぜならトッキディデスならほとんどすべての版を持っているからです。この構想が有効なものかどうかぜひご検討下さい。そして修正すべき点

があればご教示いただきたいと思ひます。

貴方の賤しき忠実なる僕

F. ロストガルド》

ロストガルドがこのような手紙と共にクレマンに送った目録印刷計画の内容はおおよそ次のようなものであった。すなわち、目録の各ページを線で区切り、冊子を開くと開いた両ページに4つの欄があるのが一目でわかるようにする。片方のページに2欄、もう片方のページに2欄である。最初の欄には2折本、第2欄には4折本、第3欄には8折本、第4欄には12折本およびそれ以下の版型の書物を記入する。この方式に従ってロストガルドは実際に自分が当時所有していたところのトゥキディデスの諸版をすべて配列して見せたのである。

クレマンは、ロストガルドの手紙、目録計画、およびトゥキディデスによる作成例を読んで、次のような返事の手紙を書いた。

《拝復 貴下がお送り下さった新しい目録作成法の原案を拝見し、貴下が実行の人であることを以前にもまして確信させられております。なぜなら、我々がこの問題について論じ合うとすぐに貴下は、その方法を頭の中で精緻に組み立てるのと同様に、容易に実行に移して見せて下さったからです。——中略——私はまず第1にこの目録法の使用法と便利さについて検討して見ました。主題が同一であって異種の書物が、ページを欄で区切ることにより同時に一目で見られるという巧みな工夫は、私にも、非常によく考えつかれたもののように思われます。これに比較できるのはおそらく、ページがいくつかの欄にわかれ、原典と訳

の各々がやはり一目でわかるようになっていた多言語訳対照聖書のみでありましょう。しかしながら、私はこの目録法の有用性に注目すると同時に、修正不可能な不都合性を予測しないわけにはゆきません。

もし同一主題の各版型の書物の量が常にはほぼ同じくらいであるならば、この方法は確かにすばらしいものでありましょう。各欄が、多言語訳対照聖書がそうであるように、互いにつり合いを保つならばこれほど良いことはありません。しかしながら貴下も私同様よくご存知のように各版型の書物の量は同じどころではないのです。貴下が例をお作りになるため選ばれたギリシアの歴史家の場合にはたまたまほぼ同量であったとしても、イタリアの歴史家たちの場合には貴下の計算と大変違うことになるのにお気づきになられましょう。イタリアの歴史家たちの著作では、4折本の数は、2折、8折、12折全部合わせたものの3分の2以上もありますし、2折本が、中型、小型本と比べて常に少ししかない他のいくつかの部門においてもおそらく同様のことがあるはずで、もしこの不都合性を補うために貴下、最も内容の多い欄の行数をページ一杯に拡張されるとするならば、それは目録秩序の一貫性をこわすことになり、もはや欄による目録とは言えません。

私が貴下に賛成したいと思ひますのは次のような点です。すなわち、この方法は個人的な図書室や書齋のための目録を作成するには有用であり得ましょう。個人的な蔵書目録なら手書きで充分ですし、各欄が満たされていてもいなくても一般の人々にはそれほど関係がないのです。しかし、全蔵書を収録するのに、2折本で5～6冊を要するほど蔵書の豊富な大図書館の目録をこの方法で印刷するというのであれば、

なかばがらあきの欄が存在するために目録の量は約2倍の12冊にもふくれあがり、それを与えられる一般の人々は当惑することになるでしょう。しかもまた、これらの欄の空所は、新たに加わる書物を都合よく収録できるでしょうか！ おそらくそううまくはゆかないでしょうし、その上、空所の少ない欄は常にまた追加記入する書物が一番多い欄でもあるはずで、たとえば神学者たちの著作の場合、小型本が大型本・中型本よりははるかに数が多いのが現状ですが、また日ごとにさらに多くの小型本がこれからも作り出されてゆくのも確かなことです。従って、すでに一杯になっている小型本の欄に新たに追加記入するのは困難なことになるでしょう。だからといって、もし追加分を参照記号でもつけて隣の欄の空所に記入するならば、それは貴下のせっきの秩序を打ちこわすこと、すなわち計画のまったくの変更を意味することになります。

以上が、貴下の提示された原案についての私の主要な見解ですが、もちろん私の指摘した点によって貴下の方法の価値が減ずるなどと言うつもりはありません。ただ次のことは確かであると思います。つまり、大図書館の目録の場合には、おそらくは克服不可能な困難性を伴うこの、欄による配列にこだわって行きづまるよりは、人々の慣れ親しんでいる主題別の自然な秩序に従う方がよいということです。たとえば聖書なら2折でも4折でも8折でも一緒に同じ項目に入れるわけです。この方法によった時の不都合は、必要な正確さをそなえた2種のアルファベット順一覧表によって容易に克服されるはずで、第1に主題に関する一覧表で、これにより同一主題について書かれた書物のすべてを即座に見出すこ

とができます。第2は著者の年令、職業、地位を簡単に記入した一覧表で、これで、彼らのすべての著作と、それらについて作られた諸版を忠実に列挙することができましょう。——後略>

ここに引用されたクレマンとロストガルドの往復書簡によって当時の印刷目録作成の主要な困難となっていたのは版型の問題であることが理解される。先号において述べたクレマンの第2の目録は、各々主題によって分類された章または節を版型(2折、4折、8折以上)別に区分し、目録上の排列と書架上の排列が同一になるような方法を取っている。それゆえ、ある主題についての目録検索にあたり目録の異なる3ヵ所に全部目を通さねばならないのである。ロストガルドはこの不便さを克服しようとしたのであった。これは考慮に価する問題であり、ロストガルドの方法が、クレマンの指摘通り実際には莫大な量の蔵書を有する大図書館の目録を印刷するにあたって致命的な欠陥を持っていたとしても、クレマンはかれとの意見の交換を通じてかなり得るところがあったのではないかと思われる。なぜなら、クレマンは、この意見の交換の後で、「図書館の目録作成の新方法に関する意見」と題した小冊子を公にして、新たな目録印刷計画を提示しているからである。彼は言う。「図書館員や図書館利用者たちの便宜のためにはすべての書物が同じ版型であることが望ましい。そうすれば、それらをあらかじめいっつかに分類して、同じ主題の書物を一緒にしてそのまま目録に書き入れてしまえば簡単にすむからである——」。しかしながら実際には大・中・小の版型の違いがあり書架上に排列する際に一緒にできないため、各分類の中を

版型ごとにわけなくてはならなくなる。「たとえばアウグスティヌスの諸作品についてあらゆる書物を知りたい時、まず『聖父』の分類を見つけ、その中で2折本の中を探し、次に4折本、次に8折その他の中とそれぞれについてさがし出さねばならない。これはたとえアルファベット順の表を用いてある程度埋め合わせられるとしても、おそらく大変不便なことであるだろう」。

彼がこの小冊子の中で考案している「最も実際の最も不都合の少ないように思われる」方法は次のようなものである。

まず書物を主題ごとに分類し、各主題に関する書物のタイトルをすべて、あたかもそれらが皆同じ版型のものであるかのように排列する。こうすれば一つの主題に関する書物は一ヶ所にまとまることになる。その結果として各主題の項目の中には2折本・4折本・8折本・12折本などが年代順あるいは版次順、またはその他の適当な順序をつけられて混在するようになるが、こうして生じた目録と書架上の位置の不一致を補なうための工夫がなされる。その工夫とはすなわち、目録の各ページの余白に3つの小さな欄を作り、1番はじめの欄には2折本の番号を入れ、2番目には4折本、3番目は8折、12折それ以下の小型本の番号を入れることである。そうすればある書物の番号が3欄のどこに入っているかで、版型、さらには書架上の位置関係が一目でわかるのである。このクレマンの方法を完全に理解するために、彼自身によって与えられている例の一部を参照しよう。

2折 4折 8折  
A81……………ギリシア語新・旧約聖書 And. Asulani (人名) 編, ヴェ

ネツィア, Aldum  
(出版者名), 1518  
2折版  
82……………同方法で編された上書の別版手書き注釈つき  
495…ギリシア語聖書,  
498 } Joh. Lonicero. (人名) 編 ストラスブール, Vuolphium Cephal. (出版者名) 1526 4巻 8折版  
83……………同上, パーゼル, Joh. Hervagium (人名) 編 1545 2折版  
499…ギリシア語, ラテン  
503 } 語対訳聖書 パーゼル, Nic. Brilingerum (人名) 編 1550 5巻 8折版  
84……………ギリシア語聖書 フランクフルト Vuchel (出版者名) 1597 2折版  
85……………70人訳つきギリシア語旧約聖書 ローマ 1587 2折版  
86……………同上 ラテン語版 ローマ 1588 2折版  
87~89……………同上 ギリシア語・ラテン語対訳版 新約聖書共 パリ 1628 3巻 2折版  
341……………ギリシア語旧約聖書 ロンドン Rogeri Danielis (出版者名) 1653 4折版

- 504…同上 ギリシア語旧  
約聖書 同出版 16  
53 8折版
- 505…同上 ケンブリッジ  
506 1665 2巻 12折版
- 342……………ヘブライ語では発見  
されていないギリシ  
ア語聖書 アントワ  
ープ Plantin. (出  
版者名) 1584  
4折版
- 507…ギリシア語詩篇 同  
出版 1584 24折版
- 508…Complutum (地名)  
版聖書になった形  
式の上書のギリシア  
語・ラテン語版 同  
出版 1584 16折版
- 509…ギリシア語 ラテン  
語対訳のダビデの歌  
パリ Nivell. (出版  
者名) 1559 16折版

Aの区分は聖書である。このような記入の方法を取れば、たとえばギリシア・ラテン語対訳の聖書をさがし出した時、今までのクレマンの目録のようにAの中の2折本の項、4折本の項、8折本以下の項3ヵ所を調べねばならないということはない。また一方、第1の欄をたどってゆけば大型本、第2からは中型、第3からは小型と版型による書物の検索も同時に容易にできるのである。クレマンはこの新方法を、従来の目録法の便利さがあってその不便さが無いものと一応は自認している。しかしながら彼は、単にこのような細かい目録技術の追求のみに自己満足している人間ではなかったようである。彼の「図書館の目録

作成の新方法に関する意見」の序文は次のようにしめくくられている。「世界でも最も豊かな図書館の一つの目録を公刊するにあたって、利用者にとって役立つ目録にする手段を見いだすのには念を入れて入れすぎることではない。それどころか利用者の意見によって自分たちの持つ見解を修正してゆこうと願わねばならない。そういう態度こそが、かくのごとき壮大な事業を完全なものにするのに、わずかずつでも貢献することになるであろう」。

クレマンが、ロストガルドとの意見の交換、また彼自身の長い経験を通じて考案するにいたったこの目録法は、主題および版型による目録として、これ以上のものが考えられないほどに巧妙かつ精緻に組み立てられたものと言えようが、実際に印刷する場合の欠点ややはり指摘されないではなかった。たとえば、その回想録の中で、クレマンとロストガルドの往復書簡を引用しているポアヴァンは、次のように述べている。すなわち、クレマンの案はロストガルドの案の持つ不都合性をまったく持っていないが、また固有の困難を生み出している。それは第1に、目録を作る際に各タイトルを最も正しく排列するのに多大な苦勞をすることであり、さらに、印刷する段階において、欄を並べて作ったり、番号を合致させたりしなくてはならない植字工や校正係にかなりの厄介をかけることがあるというわけである。

しかしながらポアヴァンの心配は杞憂におわった。なぜならこのクレマンの案は計画の段階に止まり、ついに実際に目録として印刷されることがなかったからである。後に触れるように18世紀になってから印刷目録が公刊されるのであるが、それはクレ

マンの方法とはまったく異なる方法によってなされたのであった。したがって、クレマンがこの印刷目録法案を完成した後も、フランス国立図書館の目録として実用にあてられていたのは依然として、手書きのクレマンの第2の目録である。14巻から成るこの目録の各巻の裏ページは、空欄として残されていて、表ページの欄外同様さまざまな追加記入がなされた。しかし新たに記入せねばならない書物の日々の増加につれて、この目録自体に追加記入するのは不可能となり、クレマンの大綱にしたがって、すなわち分類ごとに、さらにその分類内における版型ごとに別々の冊子になった補遺が作成されるようになったのである。

## 6 18世紀における目録の状態

クレマンの業績に一部変更が加えられたのは、1735年ころのことであった。その大きな理由としては、追加本の記入がやや混乱しはじめてきたこと、および17世紀の書誌学的区分が、すでにこの時代に必ずしもふさわしいものでなくなってきたことがあげられる。新たな目録印刷計画がたてられたが、そのために用いられた目録法はクレマンのとは別のものとなった。すなわち、クレマンがあればほど心を配らねばならなかった版型の違いによる別についてはまったく考慮されないことになったのである。さらに、クレマンにより巻ごとにつけられていた蔵書の番号は作品ごとにつけられるようになった。また同一番号のもとにまとめられていた同性質の小作品群をひとつひとつきちんと整理し直すという作業も進められた。しかしながら、これらの仕事の量の莫大さからいっても、この新しい計画を全蔵書に適用するのは不可能であり、実際に適用されたのは神学関係の部分（A聖書、

B典礼と宗教会議、C教父、Dカトリック神学、D<sup>2</sup>非カトリック神学）、教会法（E）および自然法と万民法（\*E）、それに文学関係の部分（X文法、Y詩、Y<sup>2</sup>小説、Z文献学・全集）のみであった。したがってこの時代のフランス国立図書館の蔵書目録の状態は次のようになる。すなわちA（聖書）から \*E（自然法と万民法）までと、X（文法）からZ（文献学・全集）まではこの1739年から1753年までに新たな方法によって作成刊行された印刷目録、他の区分（F法律～V科学・工芸）に対してはあいかわらず手書きのクレマンの第2の目録（これは追加本を記入した約60巻からなる補遺によって補われている）が適用されていたのである。この2系列の目録は19世紀中葉に至るまで使用されつづけ、現在でも参照されて有用性を保っている。

18世紀に作成されたこの印刷目録についてもクレマンの目録同様、追加本の記入のための補遺が作られねばならなかった。クレマンの目録には、先述したように分類ごと、さらにその中での版型の区分ごとに補遺がつけられ、受け入れ年代順に記入がなされたのであるが、18世紀の印刷目録の場合は、版型を考慮に入れずに分類ごとにやはり到着順にしたがって記入がなされた。補遺を作成する作業の困難な点は、受け入れ順に記入される1冊1冊の書物をいかにしてもとの目録の排列の体系に組み入れるかということであり、これは特別に工夫をした番号を記入事項のあとにつけ加えることによって成しとげられたわけである。しかしこのめんどろな作業はいくらかの書物に対しては行なわれないままであった。すなわち18世紀後半においては、往々にして新しく追加された書物は、巻頭に、それがもとの目録に記載されたどの書物と関連があ

るかを示すだけの番号しか付与されなかった。たとえば1682年出版の『アユネイス』4巻本のラングドック語訳はY 957という番号を与えられたが(現在はYc1309Q)、これはもとの目録のY 957、すなわち『諸諺家ヴェルギリウス』という書物の隣に排列されるべきものであるということを示すのみであった。このような番号は正式の整理番号とはみなされず、それらの書物は未整理図書として、しだいに「未登録蔵書群」という名のもとに知られる一群を形成していくことになるのである。

フランス革命の混乱は、フランス国立図書館にはそれほど危機をもたらさなかった。それどころか当時の印刷本部の長ヴァン・プレの熱意と努力により、さまざまな団体によって維持不可能になった貴重な書物が流入してきさえたのである。しかしながら蔵書の整理という面では、人員に恵まれなかったため、ヴァン・プレの超人的な働きにもかかわらず、未整理の蔵書が増加したのは余儀ないことであった。ヴァン・プレは40年近くの長期にわたって印刷本部をほとんど一人の力で管理運営しつづけたのであり、彼の死によって印刷本部は大きな混乱にまきこまれることになるのである。

## 7 1840年から1852年にかけての 発展

一代の碩学ヴァン・プレの死によって、フランス国立図書館の業務は著しく停滞した。しかしその混乱を通して印刷本総目録刊行の基礎作業が行なわれることになったのであった。この作業の中心となったのは1840年8月8日に総括理事Administrateur général に任ぜられたリシャルと、経験豊かな目録局長ノーデである。

彼らの第1の作業は、これまでの印刷本部の蔵書を2つのグループに分けることであった。第1のグループはすでに何らかの整理記号を与えられ、いずれかの目録に記入されている書籍より成る。第2のグループは、大革命の際に蔵書に加わったり、個人から寄贈されたり、委託されたりした書籍で構成され、これらにはいかなる記号も与えられていず、またいかなる目録にも記入されていない。現在、前者は登録済蔵書群Fonds portéと呼ばれ、後者は未登録蔵書群Fonds non portéと呼ばれている。

この2つの蔵書群に分けることは2つの点で重要であった。クレマンの目録をはじめ、過去のいくつかの目録に記載されたものの中には、大革命の騒擾、無制限な貸出等々によって行方のわからなくなっているものが少なからずあったので、蔵書点検をする上でこの作業が不可欠だったというのが第1の理由である。また作業中もたえず増大していく蔵書を常に正確に把握するためにもこの作業は必要だったのである。

第1の蔵書群については、目録自体が補遺をいれていくつか存在し、必ずしも記入法が厳密に統一されているわけではなかったので、まず各種記号の一覧表を作成することが必要であった。例えばこの一覧表の分類A(聖書)には次のように記されている。

F<sup>0</sup>36. 1-2

(1) 8<sup>0</sup>-A. 1-4

(2) F<sup>0</sup>-B. 1-4

8<sup>0</sup>-Bb. 1-2, n<sup>0</sup>aj. Bib. Hahn.1838.

8<sup>0</sup>-Bd. 1-18, n<sup>0</sup>aj. Cah.

8<sup>0</sup>-Be. 1-..., n<sup>0</sup>aj. Id.

(4) F<sup>0</sup>-C. 1-2.

8<sup>0</sup>-D.1, n<sup>0</sup>aj. Sola.

これらのうち、1番目のものは印刷目録中に記載されているものであり、2番目、3番目、7番目（前にカッコつきの数字が付されたもの）は、補遺中に記載があるものである。さらに残りの4つ（n<sup>o</sup>aj.とあるもの）は最初の印刷目録にも最初の補遺にも記載がない、後になってつけ加わった書物を示している。いうまでもなくF<sup>0</sup>は2折本を、8<sup>0</sup>は8折本をあらわしている。

この一覧によって、登録済蔵書群については、将来の総目録発行のための第一段階の準備が整ったといえる。次にこの蔵書群についてなすべきことは、全体の著者名別、著者不詳の場合はタイトル別の目録をつくることであった。もちろん印刷目録については大部分の著者名一覧があるし、1714年にビュヴァはその写しをつくっている。また目録の神学、教会法、万民法、文芸の各巻の巻末にはアルファベット順一覧表が印刷されている。しかしその種の一覧がいろいろ存在すること自体が検索を複雑にしていたし、またそれらは印刷公刊されていないものの方が多い。しかも最初の蔵書に追加された書籍の大部分は、ほぼ1世紀以上にわたりタイトルさえ記載されていないのである。そのようなわけで、登録済蔵書群全体の著者名一覧が次の資料をもとに作成されたのであった。第1はビュヴァのアルファベット順一覧の原本となったクレマンのノート、第2は1739年から1750年までの印刷目録のすべての項目の切り抜き、第3は補遺ノートに挿入された各項目のコピーである。この作業によって、記載済蔵書群についてはすべての書籍について著者名のアルファベット順一覧表が整備されることとなった。

次に未登録蔵書群であるが、国立図書館の蔵書の大群の中に不定期に、統一されず

しかも大量に加わってくる、目録に記載もなく、分類もされていず、蔵書印を押さしてもいない書籍を簡便に整理するためには、この蔵書群の設置はきわめて有効な方策であった。設置にあたっての原則は次のようにきわめて平易なものである。

まず整理番号を与えられていない蔵書すべてについて、ごく簡単な一覧表がつくられた。そしてこの一覧表の範囲内で大分類が決められ、その分類を示す文字は背表紙と表紙に記されたのである。次に同じ文字を記された書物がすべて集められ、それらが2折、4折、それ以下のものの3つの範疇に分けられた。そして各範疇の書物は著者名の、著者不詳の場合は、タイトルの最初の語のアルファベット順に整理されたのである。例えば、分類Xの4折版未登録蔵書群は次のように排列されている。したがって書架にもこの順で并架されたわけである。

ADELUNG. Catherinens der Grossen Verdienste um die vergleichende Sprachkunde. S. Petersburg, 1825.

ÆSCHINES. Les deux oraisons d' Eschines et Démosthène pour et contre Ctésiphon, traduites par Du Vair. (Extrait).

アイスキネス。アイスキネス、デモステネスのクテンフォンに対する賛否両演説。デュヴァール訳。（抄訳）

AHMAD bin Abubekr' bin Wahshih. Ancient Alphabets. London, 1806.

アフマド・ビン・アブベクル・ビン・ワシ。古代アルファベット。ロンドン、1806。

AHRENS (H.L.). De crasi et aphaeresi. Stol bergae, 1845.

アーレンス (H.L.) 母音同志の融合と頭



字脱出について。シュトルベルク, 1845年。

AHRENS (H.L.). *Über die Conjugation auf  $\mu$* . Nordhausen, 1838.

アーレンス(H.L.) $\mu$  (ミューイオタ)の活用について。ノルドハウゼン, 1838年。

未登録蔵書群の設置は、単に滞貨書籍を暫定的に整理することを目的とするものではなかった。図書館が将来所蔵するはずの書籍すべてを、番号もつけず目録にも記入しないまま検索しやすいように分類し、この蔵書群に継続的に組み入れていくことが企図されていたのである。したがって例えば次の2冊の4折本は分類Xの中に挿入されるが、その場合各冊にXの文字を記し、排架上はADELUNGのすぐ前に排架すればよかったわけである。

A(L') perdu de Mademoiselle Babet. Paris, 1875.

バベ嬢の墮落。パリ, 1875年。

ABUL-BAKÂ ibn Jais. Halle, 1873.

アブルーバカー・イブン・ジャイス。ハル, 1873年。

このようにして登録済蔵書群と未登録蔵書群については、著者名のアルファベット順目録ができあがったのであった。

## 8 1852年以後の業績

### — タシュローの努力 —

目録製作作業はタシュローが指導の任にあたった時代(1852-1874)に飛躍的に発展した。印刷本のいくつかの分類が全面的に改訂され、新たに体系的目録が作成された。改訂されない分類については財産目録への記入がなされた。さらにこれからふえていくであろう書物の整理番号についても、目録作成時にあらかじめ十分な考慮がはらわれたのであった。本章の目的はこの

体系的目録の概容を記すことである。それは以下に行なわれる。

1. アルファベットの大分類を決定する。
2. この大区分の中をいくつかの章に分ける。
3. この章の中をさらにいくつかの節に分ける。
4. この節の中における各書物の順を示す数字をつける。
5. この数字は発行の年代順、その書物がとりあついている事項の年代順等々の原則にしたがって決める。

したがってこのようにして定められた整理記号順に書架上に排架されるから、本の版型別による排架という原則は根本的に改められることになったわけである。同じ作品の各版については、同じ整理記号がつけられ、各版の区別は上記の記号の他に数字を付して区別した。一つの区分内は固定され、新しく挿入されることはない。新しくはいつてきた書物はまずその主題によって属すべき節が決められ、その中ですでに所蔵されている蔵書群に対して使われていた番号に続く番号を与えられた。このような分類の原則は「フランス史」、「医学」の区分の中に厳密な形で残されているので、フランス史の項を調べてみよう。

「フランス史」には記号Lが与えられ、その中が次の15章に分けられている。

- L. 予備および総記
- La. 各時代史
- Lb. 王朝史
- Lc. 新聞・雑誌
- Ld. 宗教史
- Le. 憲政史
- Lf. 行政史

- Lg. 外交史
  - Lh. 戦史
  - Li. フランスの風俗・習慣
  - Lj. フランス考古学
  - Lk. 地方史
  - Ll. フランス民衆史
  - Lm. フランス家系史
- 例えばこのうちのLk. 地方史は19節から

成り、次のように分けられている。

- Lk1. フランスの地方史・大区分史
- Lk2. 州史, 旧区分史
- Lk3. 司教区史
- Lk4. 県史
- Lk5. 管区史・郡史
- Lk6. 小郡史
- Lk7. 都市史, その他の区域史
- Lk8. アルジェリア
- Lk9. 植民地一般
- Lk10. アジアの植民地
- Lk11. アフリカの植民地
- Lk12. アメリカの植民地
- Lk13. オセアニアの植民地
- Lk14. 地方三部会
- Lk15. 州議会
- Lk16. 県会
- Lk17. 管区・郡の会議
- Lk18. 都市団体, 市会
- Lk19. 植民地議会

このうちLk7都市史, その他の区域史をさらに例にとってみると, 次のように細分されている。

- Lk7.1-6. (地方史一般に関する雑)
- Lk7.7-24. Abbevilleアベヴィユ
- Lk7.25. Abjatアブジャ
- Lk7.26. Ablain-Saint-Nazaire アブラ  
ン・サン・ナゼール
- Lk7.27. Acquiアキ

- Lk7.28-29. Acquignyアキニー
- Lk7.30-34. Agdeアグド
- Lk7.35-40. Agenアジャン
- ⋮
- Lk7.10514. Yport イポール
- Lk7.10515-10519. Yvetotイヴェト
- Lk7.10520. Yzengremerイゼングルメ
- Lk7.10521. Zillisheimジリジエム
- Lk7.10522. Zuidcoteジュイドコト
- Lk7.10523-10524. 地名不詳区域

また重要な都市などについては, さらに細かく分けられる。たとえば, Lk7. 4228-4499まではリヨン市の歴史にあてられているが, その中には以下のように細分されている。

- Lk7.4228-4270. リヨン市史。一般記述。
- Lk7.4271-4292. // 特殊記述。
- Lk7.4293-4324. // 一般的歴史。
- Lk7.4325-4349. // 各時代史。
- Lk7.4350-4452. // 歴史詳説。
- Lk7.4453-4472. // 宗教史。
- Lk7.4473-4493. // フルヴィエルの  
ノートルダム。
- Lk7.4494-4499. // 行政史。

ところで Lk71~10524 という整理記号は, 1862年, この目録体系が確立された時点ですでに蔵書されていた地方史関係書籍に対して用いられた記号である。1862年以降にはいつてきたこの分類に属する書籍に対しては, Lk7.10525 以降の番号が与えられた。

- Lk7.10525. Monographie des Halles  
centrales de Paris, con-  
struites...par V.Baltard et  
feu F.Callet.—Paris,1863.  
Grand in-fol. (パリ中央市  
場に関する論文。V.バルタ

ール, F. カレ著。パリ,  
1863年。2折大型)

Lk7.10526. Plan de Paris. Beaux-arts.  
Industrie. Par Agnus  
ainé. Paris, 1862...In-fol.  
(パリ全図・芸術・工業。  
アニュス兄著。パリ, 1862  
年。2折)

Lk7.10532. Marseille. Son passé, son  
présent et son avenir, par  
M.A. Clapier. — Paris,  
1863. In-8<sup>o</sup>. (マルセイユ  
その過去・現在・将来。  
M.A. クラピエ著。パリ,  
1863年。8折)

Lk7.10535. Inauguration de la statue  
de Boissy d'Anglas éri-  
gée à Annonay le 5 octo-  
bre 1862.—Paris, [1862].  
In-8<sup>o</sup>. (1862年10月5日, ア  
ノネーに建てられたボワン  
・ダングラ像の除幕式。パ  
リ, [1862年]。8折)

このようにLk7の一連の補遺の最初のい  
くつかは、それぞれ、パリ、マルセイユ、  
アノネーなどに関する出版物であった。配  
列の順序は国立図書館の目録課に納入され  
た日付の順であった。

また1862年から1863年にかけて出版さ  
れ、すでに目録に記入されている書籍の新  
版はこの補遺の中にはいれられず、旧版と  
同様にあつかわれた。したがってドゥラソ  
セイユ氏の『プロアとその周辺』という著  
作の1860年版と1862年版は、それぞれLk7.

1041, Lk7.1041Aという整理記号を与えられ  
後に1867年, 1873年, 1882年と版を重ねた  
ものはそれぞれ Lk.71041B, C, D の記号  
のもとに、初版本の横にすべて排架された  
のである。

これと同様の発想で分類された書籍に旧  
分類のNとO, すなわちイギリス史, スペ  
イン史, ポルトガル史, 非ヨーロッパ諸国  
史の項目がある。そしてこの改訂ととも  
に、歴史でもあり地理でもある書物に対し  
てあてられていた旧分類Pは姿を消し、そ  
の中にふくまれていた書物は各国史の中  
に入れられることとなった。Nはイギリス  
史, Oはスペイン・ポルトガル史に限定さ  
れることになったので、新しくアジア史  
(O<sup>2</sup>), アフリカ史, (O<sup>3</sup>), アメリカ史(P),  
オセアニア史(P<sup>2</sup>)の4分類が設けられた。  
これら6区分の内容はフランス史(L)のそ  
れに比べればはるかに単純であり、整理記  
号はアルファベットの大文字で示された大  
区分, 小文字で示された章, 受入順を示す  
数字の3要素から成り立っているに過ぎな  
い。したがって Nx750は「イギリス人伝  
記」の章に750番目に受け入れられた書物,  
「書簡を含むマールボロー公回想録」を示  
すのである。ジョージ・パンクロフトの  
『合衆国史』は Pb.167 という整理記号を  
与えられているが、これは「アメリカ合衆  
国史」(Pb.)の章内に第167番目に受け入  
れられた書物ということを意味するに過ぎ  
ないわけである。

このように体系的分類がなされた区分  
(L.N.O~P<sup>2</sup>, T)については、並行して著  
者名あるいはタイトルの最初の文字のアル  
ファベット順目録が作成された。

またこの他に分類A~Eについては財産  
目録への記入が行なわれた。たとえば分類  
Cの財産目録における分布は次のようにな

っている。

- C1-812. 登録済蔵書群の2折本。
- 813-1032. 未登録蔵書群の2折本。
- 1033- 将来はいつてくる2折本のための空き番号。
- 1400-2018. 登録済蔵書群の4折本。
- 2019-2159. 未登録蔵書群の4折本。
- 2160- 将来はいつてくる4折本のための空き番号。
- 2500-3412. 登録済蔵書群の8折本。
- 3413-4410. 未登録蔵書群の8折本。
- 4411- 将来はいつてくる8折本のための空き番号。

最後にタシュローは目録化も財産目録化もされていない区分に日々はいつてくる書物の《身分》を確定する暫定的な方法を次のように定めた。すなわち、今後図書館に所蔵されるすべての本は受入れの際2枚のカードに記載されるというのである。1枚は主題順の目録、1枚は作者名のアルファベット順目録のためである。大部分の場合個々の資料について整理記号を与えることはせず、未登録蔵書群に繰り入れられたので、このカードには参照記号として分類の文字しか記入されなかった。

このようにしてタシュローの任期中に分類L, N, O, O<sup>2</sup>, O<sup>3</sup>, P, P<sup>2</sup>, Tの目録, A, B, C, D, D<sup>2</sup>, Eについての財産目録、1852年以降の受入図書に対するカード編成が実行されたのであった。

その後を承けたレオポール・ドリルが行なったことは、これら先人たちの努力によって行なわれた事業の改善発展であり、そしてまたそれらの業績を踏まえた上での印刷本総目録の刊行開始であったのである。

## 9 総目録刊行開始時におけるフランス国立図書館の蔵書状況—1897年1月1日現在の状態—

フランス国立図書館はいよいよ1897年から印刷本総合目録の印刷刊行を開始した。冒頭に記したようにこの大事業は今なお継続中であり、しかも印刷目録刊行後に加わった蔵書については記載されないために、印刷刊行の時期が後になればなるほど、収録数が多くなるという避けがたい不均衡がともなうものである。しかしその第1巻を印刷刊行する時点でのフランス国立図書館の蔵書状況を概略にせよ調べておくことは決して無駄ではないであろう。以下印刷本部の大分類にしたがって概略を記し、本稿を終わることとした。

- A. 聖書 計 18,401冊  
このうち半数以上は8折本である。
- B. 典礼 計 27,926冊  
このうち24,000冊あまりが8折本である。
- C. 教父 計 4,864冊
- D. カトリック神学 計 74,322冊  
このうち60,000冊あまりが8折本である。
- D<sup>2</sup>. 非カトリック神学 計 17,581冊
- E. 教会法 計 8,680冊
- \*E 自然法および万民法 計 7,111冊
  - I. 登録済蔵書群, 未登録蔵書群の 5,431冊。
  - II. \*Ez で示されるかつての分類Z中の 431冊。
  - III. 以上以外の新蔵書群中の 816冊。
  - IV. 貴重書中の 433冊。
- F. 法学 計 144,868冊
- G. 地理および一般史 計 39,425冊

- H. 教会史 計 36,726冊  
 J. 古代史その他 計 30,754冊  
 K. イタリア史 計 19,422冊  
 L. フランス史 計 279,408冊

この分類に含まれる書物は最も多いので、この分類はさらに以下のように15章に分かれ、さらに総計900ほどの節に分かれている。

- I. 予備および総記。46節(L<sup>1</sup>-L<sup>46</sup>)  
 II. 各時代史。40節(La<sup>1</sup>-La<sup>40</sup>)  
 III. 王朝史。57節(Lb<sup>1</sup>-Lb<sup>57</sup>)  
 IV. 新聞・雑誌。37節(Lc<sup>1</sup>-Lc<sup>37</sup>)  
 V. 宗教史。195節(Ld<sup>1</sup>-Ld<sup>195</sup>)  
 VI. 憲政史。84節(Le<sup>1</sup>-Le<sup>84</sup>)  
 VII. 行政史。269節(Lf<sup>1</sup>-Lf<sup>269</sup>)  
 VIII. 外交史。6節(Lg<sup>1</sup>-Lg<sup>6</sup>)  
 IX. 戦史。9節(Lh<sup>1</sup>-Lh<sup>9</sup>)  
 X. フランスの風俗・習慣。33節(Li<sup>1</sup>-Li<sup>33</sup>)  
 XI. フランス考古学。42節(Lj<sup>1</sup>-Lj<sup>42</sup>)  
 XII. 地方史。19節(Lk<sup>1</sup>-Lk<sup>19</sup>)  
 XIII. フランス民衆史。25節(Ll<sup>1</sup>-Ll<sup>25</sup>)  
 XIV. フランス家系史。3節(Lm<sup>1</sup>-Lm<sup>3</sup>)  
 XV. フランス人個人伝記。27節(Ln<sup>1</sup>-Ln<sup>27</sup>)

- M. ドイツ史その他 計 61,929冊  
 N. イギリス史 計 15,424冊

この分類の中はさらに次の24節に分けられている。

- N. 総記。  
 Na. 一般史。  
 Nb. 各時代史。  
 Nc. 歴史細目。  
 Nd. 政治的新聞。  
 Ne. 政治的年鑑。  
 Nf. 宗教史。  
 Ng. 憲政史。  
 Nh. 行政史。

- Ni. 外交史。  
 Nj. 戦史。  
 Nk. 風俗・習慣。  
 Nl. 考古学。  
 Nm. スコットランド史。  
 Nn. ウェールズ史。  
 No. アイルランド史。  
 Np. 地方史・州史。  
 Nq. 教区史。  
 Nr. イングランド諸島史。  
 Ns. 地域史。  
 Nt. 植民地史。  
 Nu. 庶民史。  
 Nv. 家系史。  
 Nx. 伝記。

- O. スペイン、ポルトガル史 計 7,912冊

この分類の中も、分類Nとほぼ同様にO.~Oz.まで27の章に分けられている。O.~Oo.までがスペイン史。Op.~Oz.がポルトガル史にあてられており、前者は計6,403冊、後者は計1,509冊である。

- O<sup>2</sup>. アジア史 計 7,474冊

この分類は以下の20章に分かれている。各章の後の数字は冊数である。

- |                            |       |
|----------------------------|-------|
| O <sup>2</sup> . アジア一般     | 900   |
| O <sup>2</sup> a. 小アジア     | 334   |
| O <sup>2</sup> b. アルメニア    | 174   |
| O <sup>2</sup> c. コーカサス    | 91    |
| O <sup>2</sup> d. ユーフラテス地方 | 343   |
| O <sup>2</sup> e. シリア      | 395   |
| O <sup>2</sup> f. パレスチナ    | 919   |
| O <sup>2</sup> g. アラビア     | 567   |
| O <sup>2</sup> h. ペルシア     | 483   |
| O <sup>2</sup> i. インド=ペルシア | 83    |
| O <sup>2</sup> j. トルキスタン   | 84    |
| O <sup>2</sup> k. インド      | 1,023 |

O <sup>2</sup> l. インドシナ	254
O <sup>2</sup> m. チベット	151
O <sup>2</sup> n. 中国	972
O <sup>2</sup> o. 日本	368
O <sup>2</sup> p. 千島列島	5
O <sup>2</sup> q. モンゴル	114
O <sup>2</sup> r. グアタマカ	41
O <sup>2</sup> s. アジア人伝記	173

**O<sup>3</sup>. アフリカ史** 計 3,957冊

O<sup>2</sup>と同様 23章にわたる地域分類がなされている。

**P. アメリカ史** 計 10,287冊

以下の26章に分けられている。

P. アメリカ一般
Pa. カナダ
Pb. アメリカ合衆国
Pc. スペイン領アメリカ一般
Pd. メキシコ
Pe. ガテマラ
Pf. ホンジュラス
Pg. サルバドル
Ph. ニカラグア
Pi. コスタリカ
Pj. コロンビア
Pk. 新グラナダ
Pl. エクアドル
Pm. ヴェネズエラ
Pn. ペルー
Po. ボリビア
Pp. チリ
Pq. アルゼンチン連邦
Pr. パラグアイ
Ps. ウルグアイ
Pt. 西インド諸島一般
Pu. ハイチ
Pv. ギアナ一般
Px. ブラジル
Py. マゼラン海峡地方

**Pz. アメリカ大陸個人伝記**

追補

**P<sup>2</sup>. オセアニア地方** 計 377冊

以下の6章に分けられている。

P <sup>2</sup> . オセアニア地方一般
P <sup>2</sup> a. マライ群島
P <sup>2</sup> b. オーストラリア
P <sup>2</sup> c. ミクロネシア
P <sup>2</sup> d. ポリネシア
P <sup>2</sup> e. 定期刊行物
P <sup>2</sup> f. 個人伝記

**Q. 書誌** 計 14,601冊

蔵書の種類によって次の3つに分けられている。

- I. 記載済蔵書群, 未記載蔵書群に含まれるもの。
- II. I.以後の新しい蔵書
- III. 貴重書

**R. 哲学・倫理学・物理学** 計 97,456冊

**S. 自然学** 計 69,499冊

**T. 医学** 計 64,946冊

この分類中では上記以外に学位論文がある。医学はTh, 薬学はTi, 獣医学はTk と分類され, これらを加えればさらに龐大な数となる。

**V. 諸科学および芸術** 計 131,788冊

**Vm. 音楽** 計 30,169冊

この分類の中は宗教音楽, フランスオペラ, イタリア・オペラ, パレー, カンタータ等々34章に分かれている。

**X. 言語学および修辞学** 計 50,593冊

**Y. 詩学序説** 計 1,415冊

**Ya. 東洋詩** 計 1,143冊

**Yb. ギリシア詩** 計 6,904冊

**Yc. ラテン詩** 計 22,124冊

- Yd. イタリア詩 計 11,340冊  
 Ye. フランス詩 計 68,841冊  
 Yf. フランス演劇 計 18,409冊  
 Yg. スペイン・ポルトガル詩、  
 計 4,354冊  
 Yh. ドイツ詩 計 4,848冊  
 Yi. オランダ詩 計 3,028冊  
 Yk. イギリス詩 計 6,422冊  
 Yl. スカンジナビア詩 計 846冊  
 Ym. スラブ詩 計 913冊  
 Yn. ケルト詩 計 527冊  
 Yo. 上記以外の詩 計 241冊  
 Yth. 演劇 計 42,059作品

この分類はYの追補であり、戯曲として独立して発行された作品にあてられている。

- Y2. 小説 計 116,824冊  
 Z. 全集類および雑纂 計 82,307冊  
 その他を合わせた全合計 2,048,893冊

以上本誌2回にわたってフランス国立図書館の歴史をたどってきたが、これはあくまで目録史、目録技術といった狭い視野からの概略史であり、本稿自体にもさまざまに不十分な点がある。文化史的な視点をも備えた総合的なフランス国立図書館史をまとめることは今後の課題であり、筆者たちも機会があればこの意義ある研究に取り組んでみたいと考えている。本稿が専門研究家の研究の一助ともなれば幸いである。

(まつもと・しんじ 一般参考課  
 ふくだ・もとこ 索引課)

#### レファレンス事例

#### 岡島冠山に関する文献 (個人)

#### 〔回答〕

ご照会の岡島冠山(1674—1729)については、森銑三等編『近世文芸家資料綜覧』(東京 東京堂 昭和48)のこの人物の項に、主要な文献名が載っており、これらによられれば、ご調査の手がかりは大略得られると思われまので下に掲げます。

- (1) 東条琴台『先哲叢談』後編 巻3 文政13
- (2) 大阪府立図書館『大阪名家著述目録』大正3
- (3) 石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』弘文堂書房 昭和15(昭和42に複製あり)  
 本書第3章・第4節・其三「岡島冠山」に、閔歴・著作等相当詳しい記述があり

ます。第4章には京坂における業績が若干記されています。(6)の増補訂正。

- (4) 青木正児「岡島冠山と支那白話文学」(『支那学』第1巻10号, 大正10年6月)
- (5) 中村久四郎「岡島冠山著述目録補正」(同上12号, 同8月)
- (6) 石崎又造「冠山及び徂徠の護園を中心とする支那語学」(『書誌学』第2巻1—4号, 昭和9年1—4月)
- (7) 上田美汀子「岡島冠山と太平記——近世文学の交流の先駆——」(『桃源』第4巻2号, 昭和24年3月)
- (8) 瀧沼誠二「岡島冠山研究」(『国語国文研究』第42号, 昭和44年2月)  
 冠山の作品の所在については、上掲資料により得られた作品名を、それぞれ『国書総目録』(岩波書店 8冊)により検索されれば、知りえられることを参考までに付記いたします。(48参レ370)